

## トリエステ精神保健改革の最重要生き証人

ミケーレ・ザネッティ 元トリエステ県知事が語る  
バザーリアと歩んだ怒涛の7年間

～映画「むかし Matto の町があった」の上映によせて～

大熊一夫・元大阪大学大学院教授たち 16 人の視察メンバーが「精神病院のないトリエステ」を訪ねて2012年6月10日インタビュー  
(録音活字化は、山梨学院大学の竹端寛准教授)

### 日本の皆さんに、特にお話ししておきたいこと

——ザネッティさんは、どういう心づもりでバザーリアをトリエステに招いたのですか？

話は40年まえに遡ります。当時、私は30歳です。68年の学生運動の世代の一つ前の世代です。

私は県代表（日本の県知事にあたる）に選出されました。支持してくれた政治勢力は、非常に多様な勢力の寄せ集めで、私の所属はキリスト教民主党です。社会党は二つに割れていました。そして共産党。それに、言語的に少数民族だったスロベニア人の政党も入っていました。多数派と言っても、わずか一票差でした。



当時の精神保健は、サンジョヴァンニ精神病院に集中していました。県予算の保健医療コストの50%を精神病院が占めていました。精神保健政策は、財政上も大変重要でした。

前の院長が年金受給年齢に達して退職したので、新たに院長ポストを公募することになりました。当時の県与党は精神病院を人間的に改善するべきだという点で、一致していました。私は医師ではありませんが、精神保健問題を理解

するために、数か月、サンジョヴァンニ病院に通いました。

もちろん副院長も院長候補でしたが、私は、新たな改革に向けて共に努力してくれる精神科医を求めて、イタリア中を歩きました。院長ポストは公募制ですから、とにかく応募してくれる人を探したのです。

トリエステはイタリアの端に位置しています。当時、バザーリアとは直接の面識がありませんでした。でも、彼が院長を務めたゴリツィア県立病院はトリエステのすぐ近所ですから、彼のやっていることはよく知っていました。

私はバザーリアがいい、と思ったのですが、周囲は「バザーリアは危ないよ」「危険人物だから注意した方がいいよ」と私に忠告しました。

最初は、ヴェネツィアのレストランで、バザーリア夫妻と会ったのですが、私には、危険な人物にまったく見えませんでした。

私はキリスト教民主党员ですから、カトリック信者です。バザーリアの政治信条と私が同じだったとは思えません。ですが、精神保健改革をすることが決まっているわけですから、それを実現する為にできる限り広い範囲の人々と協力する事が必要不可欠だ、というのが私の信条です。

これは今でも変わっていません。

合計で 10 人ほどの応募があったのですが、その中で、バザーリアが、学術的にも実践的にも飛び抜けて優れているのは明らかでした。精神科の学会の代表者やヴィチェンツァの精神病院長も応募してくれましたが、バザーリアはすば抜けていました。

当時の彼は、アメリカでの一年間のサバティカル（研究休暇）を終えて帰って来たばかりで、パルマのコロルノ精神病院の院長をやっていました。

パルマは、左派政権です。トリエステでは共産党は野党ですが、パルマは共産党と社会党が連合して政権を動かしていました。

左翼のパルマで経験を積んでいた彼にとって、トリエステで出来るかどうか、多少考えたようですが、引き受けてくれました（註：パルマでは患者を院外に解放する方針に左翼系職員労組の同意が得られなかったといわれている）。

精神保健について私は、財政の面からも改革を決めていましたが、バザーリアが来ることによって、より人間的な支援が実現するだろうと確信しました。私たちの冒険はそこから始まったわけです。

### 事態を大きく変えるには「即閉鎖」しかないという結論に

7 年間、彼と共に精神保健改革に取り組みました。県の政治は 5 年ごとに選挙の洗礼を受けます。私は県代表として再選（註：1975 年）はされたのですが、与党連合側が少数派になってしまったので、基盤が不安定でした。再選された後の 2 年間は議会運営が非常に難しくなりました。

私は、不信任投票される前に辞任しようと考えていました。

しかし、私がいなくなれば、バザーリアの精神病院廃止の目論みがとん挫してしまう恐れは、十分にありました。

実際、再選 2 年後に辞任したわけですが、その辞任の前にバザーリアと二人で、記者を集めて「精神病院を閉鎖する」と宣言し、それから辞めることにきめました（註 1977 年 1 月に宣言）。

この閉鎖宣言は、歴史的に見て極めて重要な事だった、と今でも思っています。

精神保健改革というと、ふつう、精神病院を開放的なものにし、環境を人間的なものにする、ということでした。ですが、官僚制に乗った改革というものは、非常に時間がかかることを思い知らされました。抜本的なことをしないと事態は変わらない、ということにはなっていました。

事態を大きく変えるには「即閉鎖」しかないという結論になりました。

イタリアには 90 ほどの県があるのですが、私は当時、県連合会保健部会のトップをしていました。国内外の精神病院を見学しました。「精神病院を閉鎖する」というテーマを議論する為に海外にも出かけました。フランス、オーストリア、イギリス……。もちろん、外国や WHO からさまざまな専門家を招いて議論しました。

この状況下で、180 号法が作られていく基盤が出来てゆくのです。保健医療の面だけでなく、経済的な問題、新たな運営をした場合のコストや社会福祉の問題、そしてもちろん、精神医療の質の問題も話合いました。

一つだけ日本の皆さんに、特にお話ししておきたいことがあります。

日本の精神保健の問題点も、ある程度、伺っています。入院期間が長くて、膨大なコストがかかっている、ということも。

皆さんは既に始めておられるかもしれませんが、トリエステで始まり、WHO が世界に広めた仕組みは「行政の決定権を持っている人が議論に参加することが大事」ということです。そういう人々を巻き込むことが非常に大切だ、ということ、これを日本の皆さんにお伝えしておきたいのです。

私がいなければ、バザーリアの改革は始まらなかった、かもしれません。

もし私が彼と一緒に働かなかっただら、彼は「偉大な理論家」として一生を終えたことでしょう。フォーコーやレインやクーパー等と比較してみましょう。

バザーリアは「ただ言っただけ」ではなくて、それを実践しました。その違いが、バザーリアの偉大なところなのです。

——日本には限られたバザーリア像しか伝わってきません。バザーリアの人間臭い一面を聞かせて下さい。

私はバザーリアの伝記も書いていますが、彼は非常に機知に富んだ人物でした。気性の激しい面がありました。非人間的な扱い、不正な扱いを前にすると、自らを抑えられない面もありました。また弁証法的な対話を駆使して人を説得する能力がありました。自分の情熱を人に伝える事が非常に巧みな人でした。

一緒にロンドンやパリにも出かけました。フランコはヴェネツィア方言しか話せない人で、フランス語は下手くそでした。

当時、フランコのためにパリで大きな集会用意されていて、フランス人が沢山待っていました。彼はフランス語がほとんどできませんでした。

でも、彼の言っていることは理解されました。彼は自分の熱意を伝えられる男でした。彼は自分の思想や考え、思いを伝える能力が非常に高かった。でも、ヴェネツィア方言でしたよ（笑）。

彼の著書「L' istituzione negata」（註：「否定された収容施設」）は当時のパリでもよく知られた本でした。68年世代の精神保健の一つのマニフェストでもありました。当時の青年達は「より自由な社会」を求めて活動しました。古い体制や図式からの解放、とくに精神病者の解放が求められました。当時のヨーロッパ全体の大きな動きの中で、精神病者の解放は一つの目標のシンボルとなっていました。

——バザーリアは、当時の荒れ狂っている若者達のエネルギーを使って改革を進めた、と聞きました。政治家ザネッティは、それを容認したということでしょうか。

一つの物事が成功するのは、偶然的な要素の部分もあります。トリエステのサンジョヴァンニ病院には、医師が12人ほど不足していました。だが、バザーリアは公募するつもりはなかった。

公募したら、古い精神科医が応募してきますから。

### 怒れる若者を専門家に育てた奨学金制度

そこで彼は、12人の精神科医の給与としての財源を、若者達の奨学金に替えてくれと言いました。医者にはなったけど、まだ精神科医としての訓練を受けていない若者への奨学金です。

ロテッリやデラックアなどバザーリアの改革を引き継いだ医師たちも、トリエステにやってきたあとで、専門家としての訓練を積みました。その奨学金の期間が終わった後、正規の医師として雇われました。

精神科医だけでなく、福祉や心理の専門家のための奨学金も用意しました。実質的には、働きながら学ぶ、という意味で、大学的な役割を精神病院が果たしていました。非常に生き生きとした活動が行われていました。

——荒れる若者を使うことについて、県代表として懸念はなかったのでしょうか？

バザーリアが責任を持つと言ってくれました。私が信用していたのはバザーリアです。彼のことを信用して、彼が「やるべきだ」と言ったので、私は若者達を受け入れた。研修期間が終わった若者を採用するかどうかは、バザーリアが決めました。

——県代表として、そこまで現場に権限を渡せたことが不思議です

古い精神保健法では、精神病院の院長が、精神病院内における全権を握っていました。患者の処遇から病院経営、財政まで、全て任されていました。

唯一外部の権力が及ぶのは、司法権でした。患者の退院を許可するかどうか、は司法が握っていました。入院の時も同様です。社会との出入りに関しては、司法権が介入していたのです（註：1968年のマリオッティ法で初めて自由入院が認められたが、それ以前はすべて強制入院）。

当時のトリエステの精神病院は1200人を収容していました。オーストリア帝国が支配していた時代、つまり100年前に出来た病院でした。開設当時は500人収容を目的とされていました。その当時、世界で最も美しい精神病院、と言われました。菜園や木工をする施設もあり、医学的に実証的な医療を目指しました。

重度の障害者は奥に、そしてだんだん軽度になっていくと病棟を変えて、地域の方に近い病棟にもどっていく、そういう構造でした。一番奥には、教会を配置していました。建設時には、今の貨幣価値に換算すると80億ユーロも投じられました。

**やがて「閉鎖以外の方法はない」と気づく**

ただ現在は、「美しい場所」に戻ってきていますよ(笑)。バラ園だけでなく、大学や幼稚園、あるいは老人施設や保健局もあります。精神科の看板はなくて、保健局管轄の施設として使われています。

——最初は病棟改革が目的とされていたのに、それが病院閉鎖に変わっていった経緯を教えてください。

バザーリアが改革に乗り出した当初、つまり病棟を閉鎖する前は、病棟改革として、それまで症状別に分けられた病棟を、出身地域ごとの地区別入院病棟に分けました。

でも、やがて、閉鎖しないといけない、それ以外の方法はない、と思い始め

ました。つまり、行政的なスピードでは、人間的な処遇に到達するにはあまりにも時間がかかることに気づいたのです。

たとえ理想的な環境であろうとも、そこに 1200 人も置いておくこと事態が人間的ではない、と気がついた。「行政官を徐々に説得して一步一步」ではとても進まない。まず閉めることから始めなければならない、と、バザーリア自身が考えたのです。

もちろん、一日で決まったことではありませんよ。ゴリツィアでは住民の協力がなく、病院の中だけを良くしようとして、結局はつぶされました。もちろん、トリエステの市民の反応が違ったこともありますが、バザーリアの体験の中での自覚、「精神病院は徐々に変えられるものではない」と気づくようになっていったのです。

### ——ザネッティさんが県代表を辞められた後も改革は続いたのですか。

もちろん辞めるに当たっては、道筋をつけました（笑）。180 号法が出てから 20 以上の修正案が出てきました。それは全部、精神病院をもとに戻せ、という案でした。

コストの面で見ますと、一人あたり一日、市内の居住施設で暮らしていた方ははるかに安い、ということが、計算でわかりました。全員みんなホテルで過ごさせた方が安いとわかったのです。ホテルで暮らすのは問題だ、と言われそうですが、精神病院よりホテルにいた方が、遙かに快復につながると思いますよ（笑）。とにかく、新しい形での精神保健（注：精神病院を使わない精神保健）にすれば、コストも非常に安くなることは明らかでした。

### 危機的な状態に至る前に介入すると強制医療が減り、コストも同時に減る

昔と今で、職員の総数は、ほとんど変わっていません。しかし、医師の数が減り、他の職員の数が増えました。ただし医師の権力は、昔も今も強い。一つの地域の市民の健康は、様々な要素から成り立っています。道路の安全、食品の安全、労働現場の安全、教育の安全、もちろん、医学的な安全も……。健康を増進するためには、様々な側面での支援が必要です。それなのに、医師が全権を握っているのはおかしい。しかも、医師はその権力を放棄しようとはしません。権力を手放さない。

バザーリアは、医師達が、自分たちの権力の一部を放棄するよう説得するのに成功したのでした。

WHO は精神医療に医療全体の 10%を投入しなければいけない、と言っています。でも、トリエステは現在 5%も達していません。それでも、トリエステは特異な良い状況かもしれませんが。

180 号法は強制医療も定められています。現憲法下では、伝染病患者と精神

患者への強制入院が認められています。ただし、それはアメリカやヨーロッパ、日本とは違って、はるかにミニマムなものです。地域での治療が広まることによって、強制医療は減ります。危機的な状態に至る前に、予防的に介入することによって強制医療が減り、コストも同時に減るのです。

——病院閉鎖に関して、政治家として自身への支持層が減ることを危惧しなかったのでしょうか？

再選時は非常にいい投票率でした。もちろん、反対派はいました。バザーリアも私も何度も裁判に引っ張り出されましたし、新聞でも批判されていました（註 作業療法をやめて院内清掃作業を正規労働にした時は、入院者は労働者たり得ないと司法から異議が出たが、裁判で勝った。映画では、避妊目的で女性患者にホルモン剤を投与して訴えられる場面もある）。自分たちの選択は間違っていない、と思いながら、戦い続けていました。なので、再選時にはそれが評価された、と思いました。

——精神科医ではない県代表が、そこまで改革に情熱を傾けたのが、ふしぎです。

私は県代表として精神病院を経営する側になる前は、精神病院を一度も見た事はありません。

自分の仕事として、保健医療の半分を使う精神病院をどう経営するか、という問題に突き当たった時初めて、調査を始めたのです。当時の病院は市民に開放されていませんでした。なので、県代表となって初めて病院を訪問しました。

### 「精神病院は再建しないでください」

当時の主な関心は、コスト削減ではなくて、まず人間的な環境にしたい、ということでした。視察に入ったとき、二階は見せてもらえませんでした。酷い臭いがする病棟なので、時間もないから上には行かなくてもいい、と言われました。でも、一人で上に行くと、酷い惨劇を目にしました。二日間、ご飯が食べられませんでした。イタリアでも一番良く運営されている、と言われた精神病院でもそうだったのです。

他のヨーロッパ諸国の精神病院も見ました。入ってみれば、こういう施設は廃止しなければいけない、というのは誰でもわかります。ゼロにしない限り新しい精神保健は出来ない、というのは誰でもわかります。

90年代のユーゴスラビア紛争で、サラエボの精神病院が爆撃され、沢山の死者が出ました。医師、看護師、患者が亡くなりました。戦後、責任者がトリエステにやってきました。「戦争が大変でしたね」と話をしましたが、「病院がな

くなって幸運です」と言っていましたよ。だから私も「再建しないでください。大きな病院を再建しないように」と助言しました。

**——あなたは県代表だから中を見ることが出来たのですが、他の人は中の様子を知らなかったのでしょうか？**

オーストリア・ハンガリー帝国時代には、病院の門は開かれていました。サンジョバンニ病院の中に劇場があるのですが、私の父や母は、患者達がやっていたマリオネットを見に行ったら、と話をしていました。

病棟内の元々の窓は、割ることの出来ない程厚いガラスですが、鉄格子はありませんでした。でも、地域の人々は、病院内でどんな処遇が行われていたか、噂で知っていました。

**——以前の県代表は改革をしなかったのに、なぜあなたはやられたのですか？**

精神医療の改革は、司法や政治の改革だけでは出来ません。人々のメンタリティを変えなければならないものです。人々の頭の中の文化に追随するのが政治です。トリエステでは、バザーリアが先行していました。国は、180号法が先行しました。そして、社会のメンタリティが後から変わっていったのです。

加えて、トリエステは国境の街、海の街です。なので、もともと異なる市民に対する寛容さもありました。ただ、常にそうだったわけではありませんよ。国家主義的な時代もありました。スロベニアとイタリア人の対立もありました。でも中世から、色々な人種が集まり、交流する街ではあったのです。

**——精神保健の変革に一番必要なものは、なんですか。**

イタリアでも、大学の医局の多くはトリエステ型の改革に賛成している訳ではありません。精神保健の教科書を読むと、今でも精神病院の存在を前提としたものになっています。それは今も昔も変わっていません。バザーリアが否定した「病人の症状による分類」を今でもやっています。確かに「どういう形で治療を行うか」、を考えるのは大切でしょう。でも、本に書かれている分類で患者に対応するのは、本当に、正しいのでしょうか。

### 対話のない治療は暴力です

本に書かれた分類から治療を始めるのではなく、現場の、自分の目の前にいる患者自身と向き合うことから治療は始められなければならないのではないのでしょうか。医師と患者のお互いの人間的な理解から出発しない限り、そんな治療は暴力でしかあり得ない。病院に閉じ込めるのも暴力。拘束も同じ。強制は



暴力。対話のない治療は暴力です。

つまり抽象的な分類で、一つの形態の中に収めようというやり方は、患者個人の必要とするものや要求に必ずしも対応しないのです。学者達が決めてきた抽象的な分類に患者を区分けしようとする事、それ自体が既に一つの暴力なのですよ。

——日本では専門的な精神科医のライセンスを得るためには、強制医療を何件経験したか、が必要条件になっています。

恐ろしい！

マニュアルで決められている以外の治療方法を考えてみましょう。

当時バザーリアと一緒に出席したのですが、サンジョバンニ病院で開かれたWHOとの会議でのことです。会議中に、ある統合失調症でかなり危機的状況にある患者が入ってきました。マニュアルを読めば、興奮を鎮静させる注射しかない、と書かれているような状態です。

バザーリアは会議を中断して、患者に30分から40分くらい話をさせました。そして、興奮がだいぶ収まってきたところで、「では、会議を再開させましょう」となりました。

つまり、どういうアプローチをとるか、の違いです。これが、バザーリアがWHOの見学者達に実際に見せた治療方法です。

——なぜ昔の病院長は、精神病院内での全権を握れたのですか？

1904年の精神保健法は、強制入院しかありませんでした。強制入院をさせようと家庭医が決めると、裁判所に送られ、「この患者は統合失調症であり、社会的にも危険だ」と医学的な判断まで裁判官によってなされ、その判断で、監獄に入れられるような形で入院させました。裁判所から連絡を受けた院長は、義務として、その患者を閉鎖施設で引き受けることになります。そして、裁判官との合意がないと出すことは出来ません。すると、実質的には病院長が精神病院の中では全権を持つことになります。

当時は「社会にとって危険な人物は閉じ込める」のが一つの使命でした。それを保障するのが院長の義務でした。社会に対する責務として、裁判所から送られてきた患者を閉じ込めておくことが社会的な義務だったのです。そういう意味で、院長は権力を持たされていました。

治療するという事よりも、社会にとって危険だと裁判官が判断したら社会に出さないことこそが、精神病院長に求められていました。おかしな話ですよ、裁判官が医者のような医学的判断までして、精神病院長は逆に監獄のトップの役割を果たしていたのですから。

——トリエステの政治的状況をもっと知りたいのですが。

イタリアの県議会は、比例代表制です。私のいた当時、30%くらいをキリスト教民主党が獲得していました。今は法律が変わりましたが。私が当選する前のキリスト教民主党は、議会の多数派を占めていなかった。で、出来ないだろうからやらせてみよう、と若手の私に県代表が廻ってきて、実際に出来てしまったのです。

——再選時、精神保健政策が投票行動に影響を与えたのでしょうか？

トリエステは、全国的にキリスト教民主党が得票率を減らした時も、獲得率を伸ばした地域です。イタリアの選挙は、どういう具体的な政策か、ではなく、どのような考え方をもっている政党か、で投票します。当時、投票率は8割くらいありました。

——バザーリアの人的魅力をもっと知りたいのですが。

彼が書いていること、話していることそのものに、納得することができました。もちろん、私は勉強しました。行政官として当然の勉強です。でなければ、その現場の人と話をすることは出来ません。私自身、彼から大きな影響を受けました。友人としても。

もちろん彼と私は、人格的傾向が大きく違います。75年の選挙の時、公開の場でバザーリアが「僕は共産党に投票する」と言ったので、わたしはショックを受けました。彼が投票するのは自由だけど、公の場で言わないでほしかった(笑)。でも、選挙はキリスト教民主党が勝ちましたけどね。

バザーリアはあらゆるものに興味を持つ人物でした。ゴリツィア時代は、病院内でわが子と一緒に住んでいました。でも、トリエステ時代、子ども達は母親とヴェネチアに住んでいて、彼は一人でした。国際会議にもしょっちゅう行っていましたが、よく僕とは食事をしました。

彼はパルマ時代、サバティカルでアメリカに1年住んでいましたが、その時、バザーリアの子ども達がバービー（世界中ではやった精巧な着せ替え人形）で遊んでいたら、バザーリアはその人形の事が大変気になって、バービーについてパルマに戻って論文を書いていたね。子ども達にどうやって遊ぶのか聞いて、論文を書いていた。つまり、あらゆる事に興味を持っていました。

### バザーリアが担当した唯一の患者

妻フランカの役割も重要です。ほとんどの本は夫妻二人で書いています。彼よりも、実は彼女の部分が多かったのかもしれませんが。彼はアイデアを出し、

フランカが書いていました。

フランカ（2005年没）が亡くなる直前、私が書いたバザーリアの伝記を彼女に見せたら、「これほど笑った本はない。自分たちの思い出が生き生きとよみがえるようで、笑っちゃったわよ」と言ってくれました。

トリエステに、バザーリアが自分一人で治療した患者がいます。当時、改革に反対の医者も多かった。その中で、反対派の医師達に、一番治療が難しい患者は誰だと彼は聞きました。それは、ベッドに縛り付けられた患者でした。ベッドのネジを外して、それを飲み込んでしまうような人でした。

バザーリアがその患者の担当となり、その後その患者は退院して、患者会が運営するパールの責任者になりました。バザーリアが治療したのはその一人が最初で最後。あとは個人を診ることはせず、病院全体の運営をみるようになりました。

夜勤明けの医師・看護師から状況を報告させました。当時は彼自身、ほとんど病院で寝泊まりしていました。そして、状況を把握して、それぞれの患者について、どうプログラムを作るか、それぞれの人から話を聞きながら、バザーリアも参加しながら、決めていく。このプロセスを毎朝していました。

そして、全ての患者が参加できるアッセンブレア（患者集会）、つまり職員と患者が参加する会議では、患者自身が主役となって話をします。みな自分自身の体験をその場で話します。全ての主役がその会議に揃う。患者、医師、行政担当者が揃う。自分たちの思いを発言できるような会議が、アッセンブレアでした。テーマはその時々でいろいろで、食事のこと、仕事のこと、余暇のこと、など話されていました。

### 施しではなく権利としての給与

日本でも起きていることかもしれないですが、作業療法で、タバコかごくわずかなお金を対価に仕事をさせていました。

1972年か73年頃、精神病院の中で就労のための協同組合が結成されました。権利として給与をもらう、その金額は少なかったかもしれないけれど、施しではなく権利としてもらうようになりました。州の法律がやがて国の法律を変え、ヨーロッパでもこのような協同組合が広まるようになってきました。

協同組合は、公証人の前に会員が集まって、僕はこういう仕事がしたい、と署名することが求められます。ですが、強制入院をさせられている人は、市民権を失っているのです。公証人の前でそのような宣言をする権限がありません。じゃあ、どうするか？ 県議会の中で、協同組合の憲章を作りました。患者が公証人のもとに出かけなくても、登録名簿を作ればよいように、州の法律を改正しました。行政的にも様々な工夫がなされ、それが重なって改革につながっていきました。

## ——1970年代の改革の熱気について、もっと話してください

ヨーロッパの中における 68 年代の若者の運動で、自分たちの手で何かを変えよう、という状況が生まれました。それが 68 年の大きなうねりでした。確かに変えられた部分もあります。女性の社会参加や解放がそうです。性的にも自由な人間関係が構成されました。

ですが、社会を変えるという観点からみると、全体としては失敗しています。体制を変えよう、という気概はあったのですが、全体的に見れば失敗でした。例外は、トリエステの精神保健改革です。社会改革を求めた 68 年世代の若者達が、ヨーロッパで唯一、自分たちの思想を現実のものにできた、それがトリエステです。他では実現出来ませんでした。

### 若者たちが思想を実現できたヨーロッパで唯一の成功例

68 年当時活動した青年達の多くは、その後、自らの職を得る為に自らを売るか妥協するか、しかなかったのです。そして一部はテロリストになりました。その失敗した連中は、70 年代に極めて残忍なテロリストになって、最後には首相まで殺してしまいます（註：映画の最後の方でニュースとして出てきます）。その 68 年世代の若者にとって、トリエステはヨーロッパで唯一、自分たちの思想を実現できた場所なのです。

バザールがやっていた時は、本当に沸き立つような雰囲気でした。改革に賛成の若者だけがトリエステに集まったわけではありません。反対や疑問を持っている若者も、あるいはファシストの若者さえも、ここに来て、イベントに参加して交流していました。ある種、るつぼのような形で、そこで一つの考え方が生まれ、方向性が生まれました。

その時代の医学生達の殆どが、全国からこのトリエステにやってきました。医学部の教授達は「行くな」と言いました（笑）。バザールに影響されるな、バザール化するな、と伝統的な精神科の教授は言っていました。

## ——地域住民は、病院の開放化について、どう思っていたのでしょうか。

精神病院を開放することによって、当時、地域の住民に困惑があったことは事実です。病院から自由に患者が地域に出て行った後、出会う市民にお金を下さい、と言ってみたり。あるいはスーパーに行き、買うことを知らないから、そのまま持って帰ってみたり（笑）。

でも、ちょっとぐらいの異常な行動に対して、市民は、非常に寛容な反応を示しました。そうやって患者と一緒に暮らすことの価値や意義が、市民の中に浸透していきました。というのも、こうして開放された病院を見るために、非常に沢山の外国人がトリエステを訪れるようになりました。トリエステの市民

にとっては、国際的にもこれほど評価されたものだ、というのは、自分たちにとっても誇りになるような、そんな空気ができました。

こんな話もあります。バザーリアがいた当時、イタリア人ジャーナリストがトリエステを訪れた時のことです。タクシーに乗って「サンジョバンニ病院まで」というと、タクシーの運転手が、今すごい大改革をやっているんだ、と誇らしげに話をしてくれます。で、よく聞いてみると、患者は自由に病院を出て、街の中に繰り出していく。でも、帰りはしんどいから、みんなタクシーに乗って帰ってくる。乗って帰って来て、「お金は」というと、「ない」と答える。そこでバザーリアが「しょうがないなあ」と自分がタクシー代を出していたということです。

あるときバザーリアは、もうこれ以上は出来ない、と言い、「もうこれからタクシー代は払わないからね」とタクシーの運転手に告げたそうです（笑）。



#### 「むかし Matto の町があった」の

冒頭に登場するミケーレ・ザネッティ元トリエステ県代表。彼がバザーリアをサンジョヴァンニ病院長に登用しなかったら、イタリアの改革はなかった、と言われている  
(foto di Kazuo Okuma)